

崔顥「江畔老人愁」を読む ―七言長篇による金陵詩―

Cui Hao's Poetry "Jiangpan Laoren Chou": Concerning Jinling Written with Long Seven-Word Poetry

寺尾剛

TERAO Takeshi

キーワード：中国古典詩、唐詩、七言詩、金陵、崔顥、詩跡

一、序く金陵を詠じる七言長篇詩

盛唐の詩人・崔顥（さいこう）（七〇四？～七五四）の「江畔老人愁」（『全唐詩』卷一三〇、『文苑英華』卷三四九「詞行・雜歌中」）はこれまでさほど注目されてこなかった作品であるが、①『詩経』以来の中国古典詩の伝統である厭戦詩・反戦詩の系譜に属する作品として位置づけることのできる作品であること、②現存作品数も少なく（四二首）、その生涯についても多く謎に包まれているとは言え、唐代より『河岳英靈集』『国秀集』『又幻集』『才調集』『搜玉小集』等の同時代のアンソロジーにその名が見え、代表作「黃鶴樓」をはじめとして当時から高く評価されていた詩人の作品であること、③初唐の中期から盛唐初期にわ

たって大流行する七言長篇詩（多くは歌行体）の系譜に属する作品であること、④さらには、その七言長篇詩の中でも、都市を舞台とする作品群、たとえば盧照鄰「長安古意」・駱賓王「帝京篇」・劉希夷「代悲白頭翁」などと同じ系統の作品であること、などといった理由から、この作品の文学史上における存在意義は極めて大きいものと考えられる。

本稿では、これらの意義も踏まえつつ、新たに「唐代金陵詩史」の系譜という観点からこの作品の意義を捉え直してみたいと思う。後述するようにこの作品は、六朝の滅亡、あるいは首都金陵の崩壊を、名も無き一庶民の視点から描いた叙事詩的作品としては、嚆矢となるものなのである。

まずは、本作品を詳細に見ていくことにする。底本は『全唐詩』（卷

一三〇)とし、随時、『文苑英華』卷三四九「謔行・雑歌中」を参照し、異同については【語釈】で指摘した。参考文献としては、主として譚優学著『唐詩人行年考』(四川人民出版社、一九八一年)所収「崔顥年表」、万鏡君注『崔顥崔国輔注』(上海古籍出版社、一九八二年)、袁閻琨主編『全唐詩広選新注集評』(遼寧人民出版社、一九九一年、第二卷「崔顥」(高夢林執筆担当)、林德保・李俊主編『詳注全唐詩・上册』(大連出版社、一九九七年)卷一三〇「崔顥」(執筆担当者は不明)、季伏昆主編『金陵文詩鑑賞』(霍煥民執筆担当、南京出版社、一九九八年)を参照した。

二、本文及び語釈・通釈

江畔老人愁 (『全唐詩』卷一三〇)

江畔老人の愁ひ

江南年少十八九 江南の年少 十八九
乗舟欲渡青溪口 舟に乗り渡らんと欲す 青溪口
青溪口辺一老翁 青溪口辺 一老翁
鬢眉皓白已衰朽 鬢眉皓白にして已に衰朽す
自言家代仕梁陳 自ら言ふ 家は代 梁陳に仕へ
垂朱拖紫三十人 垂朱 拖紫 三十人
両朝出将復入相 両朝 将に出で復た相に入り

五世 豊鼓 乘朱輪 五世 豊鼓 朱輪に乗る
父兄 三葉 皆尚主 父兄は三葉 皆な尚主
子女 四代 為妃嬪 子女は四代 妃嬪と為る
南山 賜田 接御苑 南山の賜田 御苑に接し
北宮 甲第 連紫宸 北宮の甲第 紫宸に連なる
直言 栄華 未休歇 直ちに言ふ 栄華は未だ休歇せざると
不覚 山崩 海将 竭 覚えず 山崩れ海将に竭きんとす
兵戈 乱入 建康 城 兵戈乱入す 建康の城
煙火 連焼 未央 闕 煙火連焼す 未央の闕
衣冠 士子 陷鋒 刃 衣冠の士子 鋒刃に陥ちり
良将 名臣 尽埋 没 良将 名臣 尽く埋没す
山川 改易 失市 朝 山川改易し 市朝失し
衢路 縦横 填白 骨 衢路 縦横に白骨を填む
老人 此時尚 少年 老人 此の時 尚ほ少年
脱身 走得 投海 辺 身を脱し走り得て海辺に投ず
罷兵 歳余 未敢 出 兵を罷むも歳余にして未だ敢へて出でず
去郷 三載 方来 旋 郷を去ること三載にして方に来り旋る
蓬蒿 忘却 五城 宅 蓬蒿 忘却す 五城の宅
草木 不識 青谿 田 草木 識らず 青谿の田

雖然得歸到郷土 歸り得て郷土に到ると雖、ども

零丁貧賤長辛苦 零丁たる貧賤 長く辛苦す

采樵屢入歷陽山 樵を采りては屢しば歷陽山に入り

刈稻常過新林浦 稻を刈りては常に新林浦に過る

少年欲知老人歳 少年知らんと欲す 老人の歳

豈知今年一百五 豈に知らん 今年一百五なるを

君今少壯我已衰 君 今 少壯 我は已に衰ふ

我昔少年君不睹 我 昔 少年 君は睹みず

人生貴賤各有時

人生の貴賤は各おの時有り

莫見羸老相輕欺

羸老を見て相ひ輕欺する莫かれ

感君相問為君說

君の相ひ問ふに感じ 君が為に說けり

說罷不覺令人悲

說き罷れば 覺えず 人をして悲しましむ

【語釈】

○年少『文苑英華』は「少年」に作る。○青溪口「青溪」は一名、清溪。鍾山を源流とし、曲がりくねりながら流れ（「九曲青溪」とも称される）、建康宮の東側で宮城に平行して南下しつつ、建康宮東南において秦淮河に合流する。六朝時代の金陵においては、潮溝・運瀆・秦淮河と並んで最も重要な水道の一つであった。『建康実録』巻二に詳細な説明があるが、盧海鳴『六朝都城』（南京出版社、二〇〇二年）第六章「建康的市政建設」第二節「水道」の説明がわかりやす

崔顥「江畔老人愁」を読む七言長篇詩による金陵詩（寺尾 剛）

い。秦淮河と合流するあたりは、六朝貴族らが住んだ烏衣巷にも近く、

また庶民たちの雑居する賑やかな地域でもあった。樂府「長干行」で

著名な長干地区もこの合流点から二、三キロ下ったあたりにある。ちなみに崔顥にも「長干曲四首」（『全唐詩』卷一三〇）があるので、こ

こに掲載しておく。一種の組曲で、恋する女（妓女か？）とつれない男の掛け合いが交互にうたわれていて素朴な味わいがある。

其一

君家何処住 君が家は何れの処にか住む

妾住在横塘 妾は住みて横塘（長干の近く）に在り

停船暫借問 船を停めて暫く借問す

或恐是同郷 或ひは恐らくは是れ同郷ならん

其二

家臨九江水 家は臨む九江の水

来去九江側 来去す九江の側

同是長干人 同じく是れ長干の人なるに

自小不相識 小より相ひ識らず

其三

下渚多風浪 渚を下れば風浪多し

蓮舟漸覺稀 蓮舟漸く稀なるを覚ゆ

那能不相待 那んぞ能く相ひ待たずして

独自逆潮歸 独り自ら潮に逆ひて歸る

其四

三江潮水急 三江 潮水急にして

五湖風浪湧 五湖 風浪湧く

由来花性軽 由来 花性は軽し

莫畏蓮舟重 畏るる莫かれ蓮舟の重きを

なお『全唐詩』では「青溪口」の語の下に「一作『忽逢江。』と注する。『文苑英華』は第二句目、第三句目ともに「溪」を「谿」に作る。

○垂朱拖紫―「拖」は引っぱること。唐代官服の制度で紫色は三品以上、朱色は五品以上となる。高位高官を表す。○置鼓―ここでは太鼓を叩きながら貴人を警護して練り歩く儀仗隊を言うのであろう。謝朓「鼓吹曲」(『文選』卷二八)に「凝笳翼高蓋、置鼓送華輶」とあり、李善注は「小擊鼓謂之置。」とする。○朱輪―高貴な身分の者が乗る朱漆の車。『漢書』卷六六「楊惲伝」に「惲家方隆盛時、乘朱輪者十人、位在列卿、爵為通侯。」とある。○尚主―皇帝の娘(公主)を娶ること。つまり駙馬となること。○妃嬪―皇帝に付き添う女性で皇后に次ぐ位が「妃」、「嬪」に次ぐのが「嬪」である。以下、「滕」、「嬙」と続く。杜牧「阿房宮賦」(『樊川文集』卷一)に「妃嬪媵嬙、王子皇孫、辭楼下殿、輦來于秦。」とある。○紫宸―紫宸殿は唐代、大明宮(唐・高宗朝以後の実質的朝廷)内に建設された皇帝と群臣らが重大な儀式・政務等を行うための建築物。六朝の宮城には存在しない名称であるので(六朝では「大極殿」に相当)、ここでは喩えとして用いている。○建康城―建康はもと建鄴、西晋愍帝・司馬鄴の諱を避けて建康とした。三国の呉(この時の名称は建业)・東晋・宋・齊・梁・

陳の都。都城は呉の太初宮をもとに東晋の成帝が咸和二年(三三〇)に新宮を造営して「建康宮」と名付けて以降、増築改築等を繰り返して発展した。隋の征服(五八九年)によって破壊された。○未央闕―「未央」は漢の未央宮のこと。前漢高祖が建てた長安城の中樞となる部分。「闕」は本来城門の意であるが、ここでは「宮闕」の語もあるように宮城全体を指す。この句は、もちろん未央宮をもって建康宮城に喩えている。○衣冠―ここでは高貴な身分にある人々を指す。著名な例としては李白「登金陵鳳凰台」の「吳宮花草埋幽徑、晋代衣冠成古丘」がある。○市朝―市場や朝廷。人の多く集まり賑わいを見せるところ。杜甫「晚行口号」(『全唐詩』卷二一一、「杜詩詳注」卷五)に「市朝今日異、喪亂幾時休」とある。○衢路―四通八達の大通りのこと(万鏡君注「崔顥崔国輔注」など)。李涉「寄河陽從事楊潜」(『全唐詩』卷四七七)に「紅車翠蓋滿衢路、洛中歡笑爭逢迎」とある。○五城宅―『史記』卷二八「封禪書」に「方士有言、黃帝時為五城十二樓、以候神人於執期、命曰迎年。」とあるように神人・仙人が住むにふさわしい豪邸のこと。儲光羲「述華清宮五首、其三」(『全唐詩』卷一三六)に「昔在軒轅朝、五城十二樓。今我神泉宮、独在驪山陬」と華清宮の豪華な建築群を「五城」に喩えている。なお『金陵文詩鑑賞』(霍煥民執筆担当)は「金陵五城」の意、つまり金陵において春秋時代以後造営されてきた「越城」「冶城」「石頭城」「台城」「東府城」の五つを指すとする。○青谿―「青溪」に同じ。○雖然―ここでは口語的表現。二字で「〜ではあるけれども」の意。○零丁―孤独で頼るも

のないさま。高適「薊門行五首、其一」(『全唐詩』卷二二)に「薊門逢古老、獨立思氛氲。一身既零丁、頭鬢白紛紛」とある。○歷陽山―唐代の和州(歷陽郡)(現在の安徽省和県)にある山。歷陽は長江を挟んで金陵の北岸のやや南に下った所であり、ちょうど李白捉月伝説で有名な馬鞍山市采石磯の対岸に位置する。歷陽については李白詩にもたびたび登場する。また歷陽山については『方輿勝覽』卷四九「和州・山川」に「歷陽山、在歷陽縣西北四十里。」とあり、盧綸「送申屠正字往湖南迎親兼謁趙和州因呈上侍郎使君并戲簡前歷陽李明府」(『全唐詩』卷二七六)に「曉月朦朧映水闌、水辺因到歷陽山」とある。

○新林浦―『景定建康志』卷一九に「在城西南二十里。」とある。六朝以来、著名な金陵西南郊外の船着場。齊の謝朓に「之宣城郡出新林浦向板橋」(『文選』卷二七)とする詩題があり、また李白にも「新林浦阻風寄友人」に「明発新林浦、空吟謝朓詩」、「送友人遊梅湖」に「暫行新林浦、定醉金陵月」とある。○羸老―「羸」は瘦せていて弱々しいこと。疲勞困憊していること。孟浩然「書懷貽京邑同好」(『全唐詩』卷一五九)に「慈親向羸老、喜懼在深衷」とある。

【通釈】川べりの老人の悲しみ

江南の一八、九歳の少年が舟に乗って青溪口を渡ろうとしたとき、青溪口の付近に一人の老人がいた。髪の毛も眉も真っ白で、すでに老いさらばえていた。

老人は自ら語った。「私の家は代々、梁と陳とにお仕えしてきまし

た。赤や紫の官服を許された三位以上、五位以上の高位高官は三十人もおりました。両朝を通じて將軍として外征したり、あるいは宰相として朝廷の内に入りたりして、五世にわたって疊鼓を叩く儀仗隊を引き連れて高貴な赤い車に乗っておりました。父兄は三代にわたってみな皇帝陛下の公主様を娶り、女子は四代にわたって妃嬪として後宮に入っておりました。南の山の賜田は御苑に接しており、北の宮の邸宅は紫宸殿に連なる場所にございました。

このような榮華は終わることなく永遠に続くのだと確信して申していたにもかかわらず、思いもよらず、山崩れ海も涸れるというような信じ難いこと(陳の滅亡)が起こったのです。(隋の)軍隊が建康城に乱入し、煙や火が続けざまに未央の宮闕までも焼いてしまいました。華やかな衣冠を身に着けた高貴な方々も鋭い刃のもとに斬り伏せられ、良将や名臣らもことごとく殺され埋没してしまいました。天下は山や川までもが変化して、人の多く集まる市場や朝廷のようなところも失われ賑わいもなくなりました。大通りの道々には縦横に白骨が敷き詰められておりました。

今は老人となった私もこの時はまだ少年でございましたが、走り逃げて、海のほとりに身を寄せました。戦争が終わって一年あまりが過ぎても外に出て行こうとは思いませんでしたが、故郷を去ること三年目にようやく戻って参りました。仙人の住む「五城の宅」にも喩えられた我が家には雑草が生い茂り、忘れ去られたような有り様で、(莊園であった)青溪の田畑も草木が茂り、どこがどこやらわからなくなっ

ておりました。

せっかく再び故郷に帰って来られたとは言っても、頼る人としてない孤独な貧賤の身には長い辛苦の生活しかなかく、木を採るためにしばしば（長江を挟んで北岸にある）歴陽山にまで足を運んだり、はたまた稲を刈るのを手伝いにしよっちゅう（金陵西南の郊外にある）新林浦に赴いたりいたしました。」（老人の言、ここで一端中断）少年はこの老人の年齢を知ろうと思っただが、まさか今年で百五歳であったとは知るよしもなかった。（最後に老人は語った。）「あなたは今若々しく私よりも衰えました。昔の少年時代の私のことを今のあなたは見る事ができません。」

人生の貴賤の移り変わりには、それぞれ時機というものがあります。あなたにはこのよぼよぼの老人を軽んじ侮らないようお願いいたします。あなたに声を掛けられたので、それに感じてあなたにお話いたしました。話し終わってみると、不覚にも悲しい気持ちにさせられてしまいました。」

三、本詩の構成・内容および意義

この作品は換韻箇所によって六段に分けることができる。内容的には形式段落と微妙に齟齬が生じているが、とりあえず換韻箇所に応じた区切って見ていくことにする。

まず第一段四句。押韻箇所は「九」「口」「朽」。まず冒頭で聞き役

の少年と語り手の老人を登場させる。二人が出会う場所が青溪の渡し場であるというのが興味深い。この界限が【語釈】で示したように、かつては六朝時代の繁栄を象徴した地区であることを崔顥が熟知していたことを物語っている。あるいは、この近くの秦淮河にある「桃葉渡」のエピソード、つまり東晋時代の風流人王献之が愛妾の桃葉を河辺の渡し場で迎えて「桃葉復桃葉」と「桃葉歌三首」をうたったという著名な故事を連想してもよいだろう。

続く第二段八句。押韻箇所は「陳」「人」「輪」「嬪」「辰」。老人は一族がかつて六朝貴族の一員として繁栄し、贅を尽くしたという過去を誇らしげに述べる。「南山賜田接御苑」の御苑とは、いずれの地を指すか不明だが、宮城に最も近いところだと、玄武湖と宮城の間にあった華林苑などが想起される。「北宮甲第連紫宸」の「北宮」という言い方も、六朝の宮城が金陵という都市全体から見れば北側にあったと、言うことを地理的に熟知していなければ出てこない表現である。

第三段は八句。押韻箇所は「歌」「竭」「闕」「没」「骨」。いよいよ隋の侵入による兵乱と六朝の滅亡を痛ましい表現を重ねつつ述べていく。六朝滅亡時の首都金陵の悲惨さをこれほどリアルに表現した詩は、現存作品を見る限りこの詩以前には存在しない。大量に金陵関係詩文を残した李白にあってさえ、このような作品は存在しない。あえて言えば北周の庾信が侯景の乱によって梁王朝及びその都城が崩壊していく過程を痛ましく描いた「哀江南賦」以来の作と考えることもできよう。

続く第四段は六句。押韻箇所は「年」「辺」「旋」「田」。この部分からは、老人個人の体験談に移っていく。この段では都城脱出の経緯と三年後の帰還が語られる。戦闘終了後一年余りしても外出に怯え、三年後になってようやく帰還する気になったという記述は戦争体験者でなければ語り得ないような現実感がある。脱出先が「海辺」というのも金陵が江南デルタ地帯に属し、海に比較的近いという地理的な理解がなければ書けないところである。六朝期には海戦も含めた大乱、孫恩の乱（東晋末、三九九年）などがあったことも想起される。

第五段は八句。押韻箇所は「土」「苦」「浦」「五」「曙」。この段も前段に引き続き老人個人の体験談。内容的には前段と含めて一段落としてよいところであるが、前段が帰還まで、この段が帰還後の生活とすれば、一応区切れることは可能である。かつての貴族が一介の庶民に落ちぶれ、木こりや日雇い農民のような生活を送る。しかも親類縁者もなくわびしい独り身の日々。注目すべきは「歴陽山」「新林浦」という二つの地名。いずれも金陵付近であるが「歴陽山」はあの巨大な長江を舟で渡っていかなければならないところであり、また「新林浦」は金陵郊外の長江のほとり、六朝貴族らが金陵を旅立つ際、あるいは帰京する際に一泊したほどの距離がある。金陵からはおよそ一〇キロあまり、徒歩で行くとすればかなりきつい行程となる。李白が「登金陵鳳凰台」において「三山半落青天外」とうたった「三山」のすぐ近くである。いずれにせよ相当の土地勘がなければ出てこない地名であり、崔顥の金陵に対する知識の深さがうかがえる部分である。この段

崔顥「江畔老人愁」を読む／七言長篇詩による金陵詩（寺尾剛）

の最後の二句「少年欲知老人歳、豈知今年一百五」は老人の話がいったん終わって、地の文になる。ここで一呼吸入れることによって、最終段落の老人の言葉が一層際立つことになる。ところで、ここでこの老人の年齢が読者に対して明らかにされているが、それにしても百五歳とはなんとも長寿である。この作品があくまで崔顥の創作したフィクション、あるいはこの地で言い伝えられていた口碑・伝承を崔顥が詩にしたと考えればよいわけであるが（あるいはこの作品を崔顥の作でないと考ええることも可能）、仮にこの年齢で西暦五八九年の陳朝滅亡後から計算してみると、当時老人が五歳前後だったとしても、六九〇年前後となる。崔顥の生没年が七〇四年頃（譚優学『唐詩人行年考』「崔顥年表」は六九四年とする）から七五四年（『旧唐書』「文苑伝・下」に「天宝十三年卒」とある）であるので、ここに齟齬が生じる。そこで譚優学（前掲書）はこの「二百五」を百五十歳と考えることも可能として論を進めている（ちなみに本書ではこの作品を開元十五年〔七二七〕、崔顥三四歳の作とする）が、老人、崔顥の年齢、どちらを調整するにせよ、かなり無理があろう。

さて最後の第六段四句。押韻箇所は「時」「欺」「悲」。老人は「人生貴賤各有時」と、教訓めいた言葉も漏らす、最後には「令人悲」と深い哀愁の言葉をもって長い談話を完結させる。

老いさらばえた老人が血気盛んな若者に対して語り掛けるという形式は劉希夷「代悲白頭翁」をはじめとする初唐以来の伝統を踏まえているが、この作品の新しさは、老人が天下太平の時代に、戦争を知ら

ない若者に対して過去の恐ろしい戦争体験を語るという形を取っていることにある。戦争体験者が会話形式で戦争を語るということ自体は『詩経』『陟岵』など最古の詩集にも登場するし、あるいは漢魏六朝時代においても、たとえば陳琳「飲馬長城窟行」において夫婦の對話を通して、出征兵士がその苦しみを述べるなど、兵士の語りによって戦争が描かれることは多い（とりわけ楽府体詩）。しかしこの作品のように、①歴史上の著名人でなく一般の庶民の語り、②過去の戦争体験者から戦争未体験者への語り、③王朝の興亡に関わる悲惨な大戦争が題材、と整理してみた時、これら三点を全てカバーする作品となると、盛唐の中頃から中唐以降を待たなければ登場しないのではないだろうか。例えば杜甫の「兵車行」、あるいは白居易の「新豊折臂翁」や韋莊「秦婦吟」などがその例として考えられるが、その意味でこの作品はこういった作品群の先蹤をなすものとして評価すべきであろう。

四、小結「詩跡」活用の叙事詩として

すでに前節までに触れてきたように、この作品がリアリティーに富む理由の一つとして、地名を極めて有効に用いており、崔顥が現地の人間並みに土地勘を持っていたと想像できることにある。詩中に登場する「江南」「青溪」「建康城」「歴陽山」「新林浦」といった詩的名所（「詩跡」ともなっている地名、あるいはそれに準ずる「南山」「御苑」

「北宮」「紫宸」「未央闕」「衢路」「海辺」「五城宅」「青谿田」といった金陵という都市を理解していないと思いつかない土地表現などがこれに当たる。これらの語彙に支えられていけばこそ、この詩は叙事詩として現実味を帯びてくるのである。すでに拙論「隋末唐初における金陵と文学」「王氣」の帰趨をめぐる」（『愛知淑徳大学国語国文』第三号、二〇〇九年）において指摘したように、北朝系の隋唐王朝は南朝系の都であった金陵を危険視し、統一後はこの都市を一介の「鼎」として貶めてきた。また、詩人たちも金陵を描くことを自主規制的に避けてきた節がある。まして南朝滅亡を同情的に、あるいは陰惨に描くことは、隋唐王朝の正当性を否定することにもなりかねない。おそらくこういった理由から、金陵は詠史詩・懷古詩の絶好の素材であるはずにもかかわらず、その作品数は唐初からの百年間には非常に少ないのである。しかし滅亡からいまや百年以上、しかも基本的には天下太平であった玄宗朝開元期（あるいは続く天宝期前半も含めて）に到って、ようやく金陵関係の作品は増え始めてくる。その際、画期的な役割を果たしたのはむろん李白であるが、同じくこの時期に崔顥のこのような作品も登場してきたと言ったことをここで改めて強調しておきたい。確かにこの作品は、詳細に見てみると、六朝諸王朝に対して、あるいはそれを滅ぼした隋王朝に対しても、ほとんど全く諷刺や批判を行っていない。崔顥自身が自重したという可能性もあるが、このあたりがこの時代の限界であったのかもしれない。